

加古川流域（東播磨地域）の「山田寺亞式」軒丸瓦と顎部（がくぶ）施文軒平瓦

寺 岡 洋

播磨の「山田寺亞式」軒丸瓦（続）

前号（258号）では、山背（北白川廃寺・北野廃寺）、丹波（和久寺跡）、但馬（三宅廃寺・立脇廃寺・殿岡廃寺）で見られる、軒丸瓦の外縁（周縁）に、珠点と線による装飾が施された特異な軒丸瓦、「山田寺亞式」（輻線珠文縁とも）と呼ばれる軒丸瓦を紹介しました。

古代にあって瓦・瓦葺建物（宮殿・寺院・役所等）は社会的権威の象徴であり、瓦からは様々な情報を得ることができます。その一例として、「山田寺亞式」瓦の使用は、秦氏・秦氏の同族、あるいは渡来系氏族が寺院の造営・運営に関わっていたのではないか、と推測可能です。

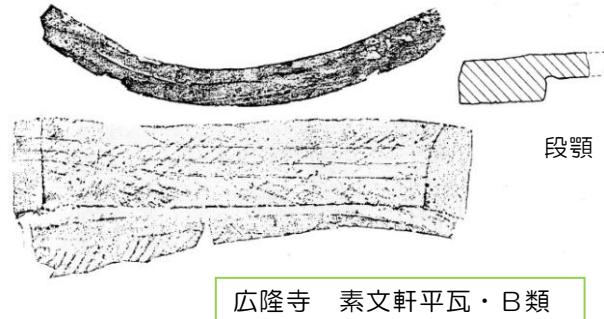
前号では肝心の播磨の「山田寺亞式」瓦については紹介する誌面がなくなったので、今号では播磨の「山田寺亞式」瓦の紹介から始めます。播磨では加古川流域でのみ確認されており、当然、なんらかの理由があったと思われます。

前号で播磨の「山田寺亞式」軒丸瓦出土地を5ヶ所と書きましたが、2ヶ所確認できず、3ヶ所（殿原廃寺・河合廃寺・中西廃寺）に訂正します。

顎部施文軒平瓦 一 顎に文様をもつ瓦 一

今号では併せて、これまた馴染み薄い「顎部施文軒平瓦」を取上げます。「瓦のアゴてどこや」といわれそうですが、瓦を人の顔に見立て、下端部のあたりを指しており、そこに文様やら、凸帯を貼付けた軒瓦を顎部施文瓦と呼んでいます。播磨では軒平瓦でしか見られませんが、九州では軒丸瓦でも見られ、新羅の影響が顕著です。

この顎部施文軒平瓦も、「山田寺亞式」軒丸瓦と同じルート（山背・丹波・但馬）を通じ播磨に伝わったと考えられ、前回、一緒に取上げればよかったです。誌面の関係でバラバラになり話がちょっとややこしくなりました。



広隆寺 素文軒平瓦・B類

さらに話がややこしくなるのが、伝播ルートが北山背だけではなく、法隆寺（斑鳩）からも加古川流域に伝わったようで、7世紀後半の造寺集団（寺院を建立し、運営した氏族集団）のネットワーク、地域間の交流は広範囲で複雑であった。

日本列島における顎部施文軒平瓦の類例は限られており、1995年の段階では66遺跡が確認されていた〔亀田1995〕。陸奥（9）、山背（10）、播磨（13）が多く、美作（6）、伯耆（3）、豊前（3）、備中（3+2）と続く。吉備・伯耆の顎部施文軒平瓦は、播磨を経由して伝えられた可能性が指摘されている。

この顎部施文軒平瓦の祖型・系譜については、統一新羅なのか、大和・山背で独自に創案されたものか、現在、はっきりしていません。なぜ、見えない個所に手間暇かけて文様や凸帯を付けるのかも謎です。

前回、「山田寺亞式」瓦で取上げた山背・丹波・但馬ルートの顎部施文軒平瓦から始めます。

I 山背・丹波・但馬の「顎部施文軒平瓦」

■ 広隆寺 顎部施文軒平瓦（上図）

京都市右京区太秦。律令制下の山背国葛野郡。洛西の古刹、太秦の広隆寺に足を運んだことがない方はいないのではないでしょうか。

広隆寺が推古紀11年（603）に記される秦造河勝（はたのみやつこかわかつ）が建立した蜂岡寺なのか、推古紀31年（623）に新羅使がもたらした仏像を納めた葛野秦寺（かどののうづまさでら）なのか決着付いていないが、いずれにしても、秦氏が建立した寺院であることには違いない。

北山背一帯に立地した北野廃寺・広隆寺・北白川廃寺は、秦氏により建立、あるいは密接な関係をもつ寺院群と考えられている。

広隆寺では「山田寺亞式」軒丸瓦は見られないが、顎部施文軒平瓦が出土している。素文（瓦當に文様がない）軒平瓦・B類（上図）とされるも

ので、段顎（顎部の形が段になる）に細い平行沈線を3条刻む。瓦当の面取りや顎面の沈線は**樺原**（かたぎはら）**廃寺**との関連も強いと指摘されている。年代は、7世紀後半 [堀2010]。

広隆寺の推定寺域内での発掘調査は何回か行われているが、飛鳥白鳳期に遡る明確な寺院の遺構はまだ確認されていない。

■樺原廃寺（国史跡）顎部施文軒平瓦 3種

阪急京都線・洛西口駅の北西1.8kmくらい。京都市西京区樺原。律令制下の山背国葛野郡。

向日丘陵東麓に立地しており、北は東西方向に山陰街道、東方には物集女（もすめ）街道が南北に通過し、桂川と京都市内を見下ろせる絶好の位置に建つ。史跡公園に整備され、塔基壇が復元されている（上図写真）。地下式の巨大な塔心礎は埋め戻されている。

樺原廃寺は、瓦積基壇に八角の仏塔という、ここしかない、という特異な景観をもっていた。飛鳥・白鳳時代の八角形建物は、前期難波宮（大阪城の南、大極殿基壇が復元されている公園に表示あり）と古代山城の鞠智城（熊本県、建物が復元されている）の3ヶ所以外知られない。

中門基壇（東西約20m×南北約11m）と南面回廊はあるが、金堂が極めて小さく（東西約14m×南北不明）、講堂は存在したかどうか疑問という謎の多い寺である。一塔三金堂をもつ高句麗様式の伽藍配置も想定されているが……。寺域は広い（東西65m×南北113m）。創建年代は7世紀第3四半期。

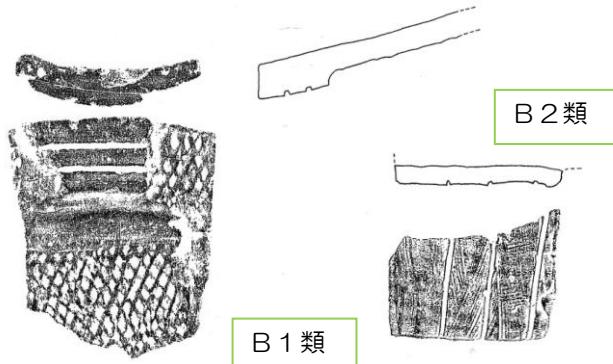
樺原廃寺の建立集団

・氏族については、北山背が秦氏の影響力が強い地域であること、八角形という特異な塔の存在、瓦積基壇、出土する瓦が広隆寺・北野廃寺などと関連があることから秦氏という説が有力とされるが [堀2010]。

軒瓦は、軒丸瓦5型式、軒平瓦4型式。顎部施文軒平瓦は、素文軒平瓦B1類・B2類・B3類が



ある。B1類は、粘土を貼付して段顎を作り、挽型で2条の沈線を入れる。B2類は、挽型で3条の沈線を刻む（図は段顎部分が平瓦から剥離したもの）。B3類は珍しく顎面に蓮華文が押捺され、さらに挽型で2条の沈線を刻んでいる。

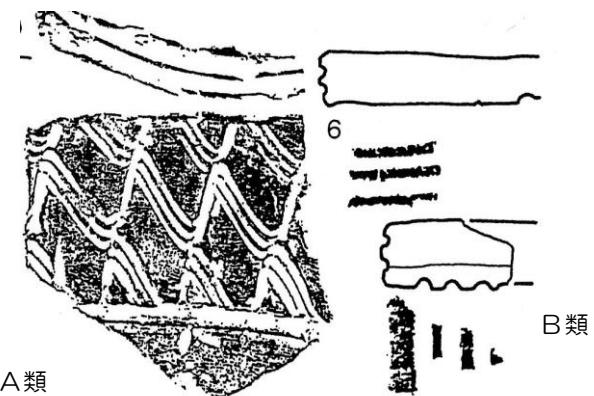


樺原廃寺では、顎部施文軒平瓦が3種もあり、あるいはここから広がったのかもしれない。

いずれも「山田寺亞式」軒丸瓦とセットにならない。秦氏を形成する氏族集団により採用する瓦の文様などに違いが出たのだろうか。

■和久寺（わくでら）跡

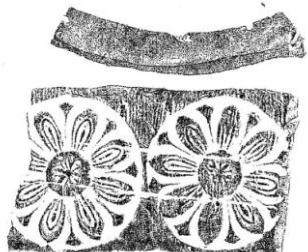
●山田寺亞式瓦 × ■顎部施文軒平瓦（2種）



所在地は福知山市和久寺、令制下の丹波国天田郡。北山背から山陰道を経由して但馬につながる道沿いに立地する。前号で「山田寺亞式」軒丸瓦を紹介したが、顎部施文軒平瓦（WHO1系）も出土している。

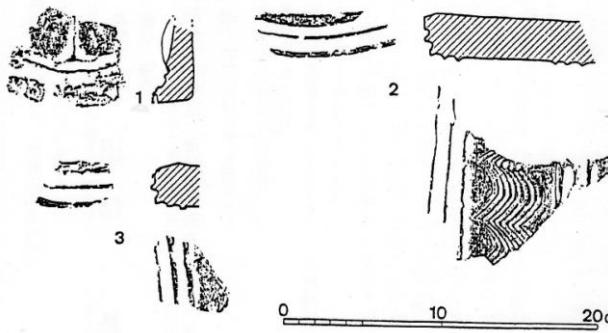
三重弧文軒平瓦に、ヘラ描き波状文が施されるもの（A類）と、弧文状の段を有するもの（B類）がある。軒平瓦は1型式・2タイプしか出土していない。A類は立脇廃寺（朝来市）、B類は平川廃寺（城陽市）で出土している [大槻1987]。

寺院建立集団には、秦氏あるいは秦氏の同族・和久勝（わくのすぐり）が関わる。



B3類軒平瓦

■立脇（たちわき）廃寺
●山田寺亞式瓦 × ■額部施文軒平瓦



所在地は朝来市立脇、令制下の但馬国朝来（あさご）郡。額部施文軒平瓦が2点図化されている [田畠1995]。出土した軒平瓦の破片は4点あり、瓦当文様はすべて三重弧文で、額の形式は無額（段を作らない形式）。「最も破片の大きいものは、凸面側約6cmの幅で、三重の凸帯によって区画を作り、その中に櫛状の工具によって波状文を施している（上図右端）」。

朝来郡桑市郷には、「赤染部」という秦氏の同族と思われる人物の居住が確認され、但馬国府出土木簡にも「赤染部」が記載されることから、赤染部が立脇廃寺造立に関わった可能性がある。

■三宅（みやけ）廃寺
●山田寺亞式瓦 × 三重弧文軒平瓦

豊岡市三宅、令制下の但馬国出石（いずし）郡。瓦積基壇（右図）が出土地で、軒平瓦も初めて出土し、「額部を付した端面に三重の重弧文を施す」とある [潮崎2001]。三宅廃寺は袴狭（はかざ）遺跡（第1次但馬国府あるいは出石郡家）の北側に近接する。袴狭遺跡では、「秦部」を記した木簡・墨書き器が多く出土しており、やはり秦氏と関連する。

■殿岡（とのおか）廃寺
●山田寺亞式瓦 × ■額部施文軒平瓦

美方郡香美町村岡、令制下の但馬国七美（しづみ）郡。重弧文軒平瓦が出土している [谷本2001]。詳細不明だが、写真では軒平瓦に逆V字状の文様

が刻まれており、額部施文軒平瓦であろう。



II 加古川流域（東播磨地域）の「山田寺亞式」軒丸瓦と額部施文軒平瓦

播磨では加古川流域にのみ「山田寺亞式」軒丸瓦が採用される（殿原廃寺・河合廃寺・中西廃寺）。

額部施文軒平瓦は、殿原廃寺・中西廃寺・繁昌廃寺・吸谷廃寺、それに、市川中流域であるが賀毛郡との関係が密接な神前郡の溝口廃寺・上野遺跡（窯跡）を加古川流域と合わせて取上げる。神前郡は東播磨と呼ばれる地域になる。

■殿原（とのはら）廃寺①
●山田寺亞式瓦 × ■額部施文軒平瓦

所在地は加西市殿原。『播磨国風土記』の賀毛郡になる。加古川の支流・万願寺川の左岸。国府（こう）寺の境内。西隣りは泉小学校、東隣は溜池。中国道・加西ICから北西2km弱。発掘調査（網掛け部分）により、軒丸瓦4種類、軒平瓦6種類が確認された。

軒丸瓦のⅡ類（单弁8弁、外縁に珠点と輻線文を交互に入れる）が、いわゆる「山田寺亞式」瓦になる（右図）。年代は7世紀後葉

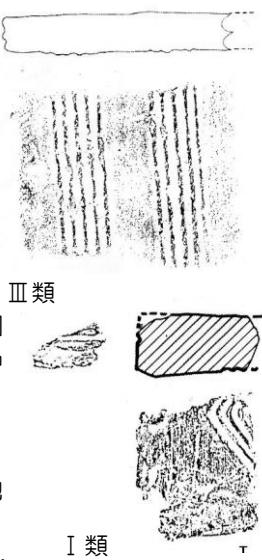
軒平瓦は重弧文が3種類、唐草文が3種類。Ⅲ類（三重弧文）には額部（無額）に櫛状工具による直線文を施した例がある。このほか、I類とされた、瓦当部分に沈線を一条施し、額部（無額）に波状文を施した平瓦？がある。重弧文軒平瓦は、軒丸瓦I類やⅡ類と組み合うものとされる [菱田

2010]。

殿原廃寺では、山田寺亞式軒丸瓦と顎部施文軒平瓦が組み合っている。このセットがこれらの特異な軒瓦の本来のあり方かもしれない。

ところで、殿原廃寺は「知識経」として知られる『大智度論(だいちどろん)』奥書(734年)に記される「播磨国賀茂郡既多寺」の有力候補地である。既多寺(きたでら・けたでら)は知識経だけではなく、既多寺も「知識」により建立・運営されていた可能性が高い、と考えられる。

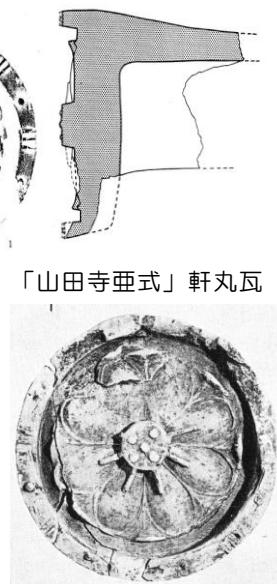
殿原廃寺は、瓦の文様からは近隣の繁昌廃寺や吸谷廃寺より、西条廃寺など加古川下流域の寺院との共通性が高いとも指摘されている。



縁は山田寺式軒丸瓦の特徴の一つであるから、「山田寺亞式」瓦の採用と関連するかもしれない。

□ 重弧文軒平瓦

東播磨では重弧文軒平瓦は比較的みられる。河合廃寺・殿原廃寺・広渡廃寺・吸谷廃寺(以上、賀毛郡)・中西廃寺(印南郡)・溝口廃寺(神前郡)などがある。神前郡は、既多寺知識経のメンバーに名前が見られ、溝口廃寺は吸谷廃寺と川原寺式軒丸瓦が共通するなど、播磨では東播磨の文化圏に入っていたようである。



河合廃寺と新部(しんべ)廃寺

河合廃寺は加古川流域でもっとも古い時期の古代寺院とされる。河合廃寺が建立された川合里には、新部大寺(しんべおおでら)廃寺とも呼称される新部廃寺が近接して建立されており(左欄参照、互いの鐘の音が聞こえる距離である)、古代寺院が里(さと)という狭い地域を基盤に建立されたものないことを窺がわせる例である。

河合廃寺と新部廃寺は尼寺と僧寺ではないかとも考えられており、想像の域を出ないが賀毛郡あるいは加古川流域の仏教センターのような位置を占めていたのかもしれない。

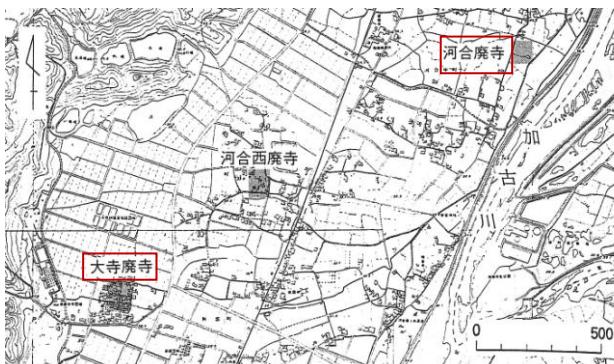
新造院(出雲国大原郡斐伊郷)との対比

比較できる類例が『出雲国風土記』(733年成立)にみられる[寺岡2011]。大原郡斐伊郷(ひのさと)には、2ヶ所の「新造院」(寺院名が記載されない)が存在し、それぞれ僧5人と尼僧2人がいた。尼僧のみの新造院は明らかに尼寺である。出雲国全部合わせても僧尼は10人しか記されないうち7人である。大原郡斐伊郷の新造院は、国分僧寺・尼寺建立前には出雲の仏教センターのような存在であったのであろう。

僧寺の造立者は、秦氏の同族と思われる「勝部臣(すぐりべのおみ)虫麻呂」であり、尼寺は樋伊支知麻呂(ひのきちまろ)が建立している。樋伊支知は地名の樋伊(ひ)と支知(きち)の複姓であり、吉(きち)氏の同族と考えられる。吉氏は蟾津江(ソンシンガン)流域の己汶(こもん)出自の氏族。

■ 河合廃寺(2)

● 山田寺亞式瓦 × 重弧文軒平瓦



小野市河合中町に所在。JR加古川線青野ヶ原駅東南1km、運動公園西隣の薬師堂周辺。『播磨国風土記』の賀毛郡川合里。加古川右(西)岸の沖積地、加古川に近接する。廃寺跡の東側が落ち込むが、加古川の旧流路とのこと。

単弁軒丸3種、軒平瓦4種(重弧文3、唐草文1)、鵝尾、平頭(伏鉢の上にのる四角部分)、灯籠の火袋なども出土している。塔跡(現在は水田)が調査されている[田岡ほか1958、井内1971]。

創建瓦は、「山田寺亞式」軒丸瓦(右欄図版)と山田寺様式とも言える重弧文軒平瓦が組み合うが、顎部施文軒平瓦はみられない。

◎ 重圈文軒丸瓦(外縁に圈線をめぐらす)

外縁が重圈文の単弁軒丸瓦も見られる。重圈文

■中西廃寺③)

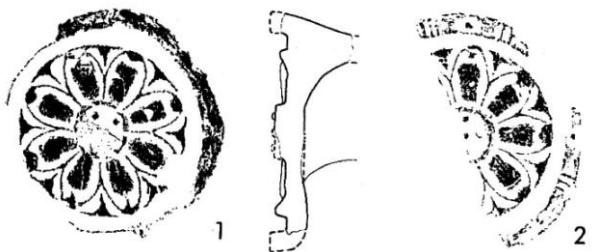
●山田寺亞式瓦 × ■額部施文軒平瓦

所在地はJR宝殿駅北東1.8km、加古川市西神吉町中西。周辺は住宅地になっており塔跡に建てられた小さな薬師堂を探しにくい。寺跡は加古川西岸の洪積層台地縁端になり、広大なデルタを見下ろす絶好の位置

である。台地に沿って山陽道のバイパス道が想定されており、川の東岸には石守廃寺が立地する。

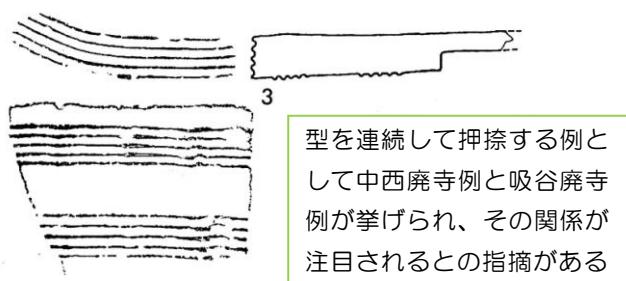
台地の南側直下に「石井の清水」が湧出し、その蓋石に石製露盤と刹(さつ)が使われている。調査はされていない。『播磨国風土記』の印南郡。

薬師堂境内に巨大な塔心礎(224×185cm)が残り、円形孔の周りを環状溝が巡る。環状溝は立脇廃寺・西条廃寺の心礎でも見られる。



軒丸瓦3種、軒平瓦2種が知られる。山田寺亞式軒丸瓦(上図1・2 外縁に珠文と3本の輻線文とを交互に配する)と、額部(段額)に5条の平行条線文を押捺施文した五重弧文軒平瓦(下図3)のセットが創建瓦とされる[今里1996]。

創建年代は7世紀末葉。平安時代末葉まで存続しており、定額寺(律令国家により公認され、援助を受けた寺院)であったと考えられている。



■繁昌廃寺④)

■額部施文軒平瓦

所在地は加西市繁昌町。加古川の支流・普光寺川の西岸段丘上に位置し、寺域のすぐ西は丘陵で、工業団地に造成されている。窯跡4ヶ所。

丘陵上に乎疑原(おぎわら)神社が鎮座し、その境内には普光寺川から発見されたと伝わる白鳳期の石像五尊仏(右図)が安置されていた。繁昌廃寺の仏像であった可能性が高いと考えられている。

繁昌廃寺は発掘調査され、広渡廃寺(小野市)と共に地方寺院の実態が明らかになっている(右図)。ちなみに、繁昌廃寺・広渡廃寺は、薬師寺式の東西双塔を備える。

軒丸瓦4種と軒平瓦2種が調査で出土しており、それ以外に収集された瓦に額部施文軒平瓦がある(右図)[井内1990]。

波状文は、今回紹介するように額部の施文に最も多用されている。注目されるのは瓦当の文様が、法隆寺式軒平瓦(忍冬唐草文)であることで、法隆寺式の瓦の影響と、北山背の影響が在地でミックスされている。

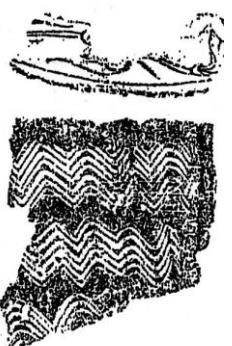
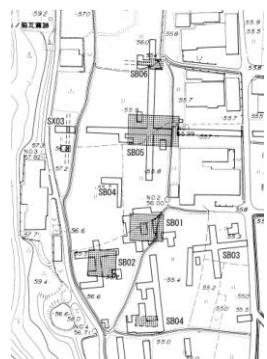
■吸谷廃寺⑤)

■額部施文軒平瓦

(3種)

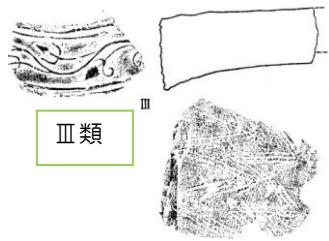
所在地は加西市吸谷町。殿原廃寺から西へ約5km。賀毛郡の西端になり、神前郡の溝口廃寺・多田廃寺にも5km余りと近い。三方を山に囲まれ、東側のみ開口する小平野に位置し、通常の古代寺院の立地と異なる。山寺を志向したのであろうか。

観音堂(慈眼寺)の境内に、塔心礎や柱座、地覆座をもつ礎石が集められている。また、近所の溜池の底に瓦窯跡が確認されている。



発掘調査が行われているが、主要伽藍の遺構は検出されてない。ただ、幢幡（どうばん 法会に立てる旗）の支柱が見つかっており、寺院の活動の一端を想像できる。

軒丸瓦2種、軒平瓦5種が知られる。軒平瓦は四重弧文（I類）、忍冬唐草文（II類 法隆寺式）、均整唐草文（III類）、間延びした

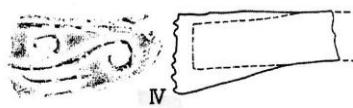


唐草文（IV類）などに分類され、II類には顎面に波状文風の施文を行うものがある（前頁）。III類にも「粗なヘラ描波状文」（上図）が見られる。

顎面の施文は細い棒状の型を横方向に連続押捺するか、もしくは手描きの櫛描波状文を施すものが多く、すべて段顎。型を連続して押捺する例は先例の中西廃寺と吸谷廃寺のみであり、技術的関連が推測されている〔竹原・津川2005〕。

新羅系の「包み込み技法」

IV類は、「瓦当部を包み込み技法で製作していることが観察できる」（〔菱田2010〕）と指摘される。

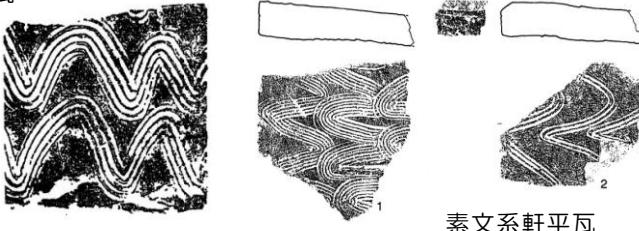


包み込み技法は、平瓦をいったん乾燥させ、その広端部を包み込むようにして瓦当部分を成形するやり方（上図）で、新羅の技法と評価されている〔上原1995〕。一般的な成型方法と異なるので、新羅系工人の存在が推測される。

■溝口廃寺6)

■顎部施文軒平瓦（4種）

平瓦



素文系軒平瓦

所在地は姫路市香寺町溝口。市川中流右（西）岸の河岸段丘の縁辺部に位置する。発掘調査はされていない。双塔伽藍が想定されているが、塔心礎の大きさが極端に違っており、同時期の塔心礎であろうか？

軒瓦はI～IV期に分類されている。I期の軒平瓦は素文系と重弧文系があり、共に顎部施文が見られる。素文系には櫛描波状文が施文されるが、多状と少条の2種ある（上図の右2種）。

重弧文系では細密な波状文（右図）あるいは籠描直線文がある。

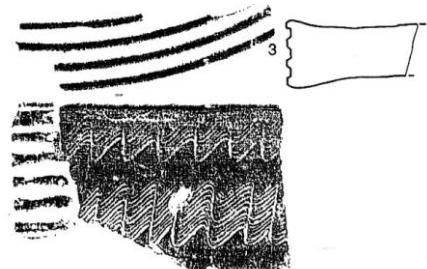
平瓦にも波状文が見られ（左欄左端）、平瓦と軒平瓦が同じ工房で作られたことを裏付けるものであろう。

蛇足だが、溝口廃寺といえば、下野薬師寺 → 興福寺 → 溝口廃寺へと範型が動いた珠文帯均整唐草文軒平瓦が有名である。

■上野遺跡（窯跡）7)

■顎部施文軒平瓦

所在地は姫路市船津町。市川中流の東岸、北東1kmには多田廃寺。『播磨国風土記』の神前郡多駄里（ただのさと）。



近くには、「參度（まいわた）り來し百濟人等、有俗（ならひ）の隨（まにま）に城を造りて居りき」と風土記に記された城牟礼（きむれ）山が存在する。

採集された四重弧文軒平瓦に櫛描波状文が見られる（上図）。分厚い顎部の一部が剥落した下から6本以上の凸帯が現れており、凸帯の上に粘土を重ねて櫛描波状文を描いたようである。

今回紹介した加古川流域（東播磨地域）では、顎部に凸帯が見られる唯一の例になる。凸帯は揖保川流域（西播磨地域）では普遍的に見られる。

III 法隆寺式軒平瓦（忍冬唐草文）と顎部施文軒平瓦

■法隆寺・中宮寺 215A型式軒平瓦

加古川流域・東播磨地域では、新部廃寺・繁昌廃寺・吸谷廃寺・野口廃寺の4ヶ寺で、法隆寺式軒平瓦の出土が知られ、繁昌廃寺・吸谷廃寺では顎部施文も見られる〔上原1995 菱田2006〕。加古川流域の法隆寺式軒平瓦は、上宮王家・山部連（やまべのむらじ）・山直（やまのあたい）と関連すると考えられている。

話がややこしくなるが、その法隆寺式軒平瓦のうち「215A型式軒平瓦」と呼ばれる軒平瓦には額部施文が見られる（右図）。

大和では法隆寺（斑鳩寺）と中宮寺にのみ額部施文軒平瓦が見られる。現在、我々が見る法隆寺は7世紀後半以降に再建されたもので（再建非再建論争がある）、西院伽藍と呼ばれている。その西院伽藍より古い時代の施設（斑鳩宮の時代）から出土する215A（大）型式軒平瓦の額面には、ほぼ半数のものに瓦当文様（唐草文・火焰文）と同じ文様が箆書きされており、瓦の実年代は630年代と推定されている。

中宮寺跡13次の現地説明会（塔心礎を露出させた時の調査 2010.2.21）では、「斑鳩寺215Aと同範」と明記されていた。

215Aの系譜を引く法隆寺西院伽藍創建時の軒平瓦（216型式軒平瓦）では、額部施文は無くなり、額面に施文する軒平瓦は突然登場し、法隆寺では一代で絶えたことになる。

加古川流域の新部廃寺の軒平瓦の文様は、法隆寺式軒平瓦は216A型式に酷似すると指摘されている〔竹原・津川2005〕。新部廃寺に続く繁昌廃寺・吸谷廃寺例には額面施文例が見られるが、その文様は斑鳩寺例とは似ても似つかない。

施文された文様からみると、加古川流域（東播磨地域）における額部に施文する発想はやはり山背・丹波・但馬コースによるものであろう。

まとめ

i) 播磨における「山田寺亞式」（輻線珠文縁）軒丸瓦の出土例は、加古川流域に立地する殿原廃寺、河合廃寺、中西廃寺の3ヶ所のみである。

加古川流域には20ヶ所前後の古代寺院が存在するが、その中で最初に建立された寺院と推測される河合廃寺から出土するのは、北山背・但馬ルートが当時の最新技術・情報ルートとして重要であったことを裏付けるものであろう。山陽道・瀬戸内海ルートと山陰道ルートの2チャンネルが存在していたことを裏付ける。

ii) 秦氏と関連する文字資料には、「優婆塞（うば



そく）貢進文」（正倉院文書）に

「秦人足嶋（はたびとのたるしま）年廿六播磨国

賀茂郡山田郷戸主 秦人水間 戸口」

という文書があり、山田郷は広渡廃寺に近い。秦人が広渡廃寺の建立に関わったかどうかは分からぬが、東大寺で正式の僧になって帰郷したであろうから、秦氏とその同族が関係した寺院が賀茂郡に存在したことは確実である。

吸谷廃寺では新羅系の「包み込み技法」がみられ、新羅系の工人として秦氏と同族の可能性は考えておく必要がある。広渡廃寺の軒丸瓦は新羅系だとの指摘もある〔金誠龜2000〕。

iii) 額部施文軒平瓦は、6ヶ所（寺院付属の窯跡は除く）。凸帯が見られず（上野遺跡例を除く）、波状文が多用されるようだ。

「山田寺亞式」軒丸瓦、額部施文軒平瓦、忍冬唐草文軒平瓦などの出土状況

	山田寺 亞式	額部 施文	忍冬文 軒平瓦	ジグ ザグ	双塔 伽藍
斑鳩寺		●	—	●	
北白川廃寺			●		
北野廃寺		●			
広隆寺				●	
樅原廃寺				●	
和久寺		●		●	
三宅廃寺		●			
立脇廃寺		●		●	
殿岡廃寺		●		●	
殿原廃寺	●		●		
吸谷廃寺		●	—	●	
繁昌廃寺		●	—	●	●
河合廃寺			●		
新部廃寺				●	●
広渡廃寺				●	●
中西廃寺	●		●		
石守廃寺					●
野口廃寺			●		
溝口廃寺		●			●?
多田廃寺					●
上野遺跡		●			

平瓦のジグザグ縄叩き、双塔伽藍も併せ表示する。上野遺跡以外の窯跡は寺に含めた。

*注・参考文献は別紙になります（HPに掲載）

注

1) 殿原廃寺

鎌谷木三次 1942 「**殿原廃寺**」

『播磨上代寺院跡の研究』成武堂
立花聰・菱田哲郎 1985 「**殿原廃寺跡**」『兵庫県埋蔵
文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県文化協会
森幸三 1993 『**殿原廃寺**（第4次）一市立泉小学校
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

兵庫県加西市教育委員会

菱田哲郎 2008 「賀茂郡の古代寺院」 p204～
『**加西市史**』第一巻本編1 加西市
菱田哲郎 2010 「**殿原廃寺・繁昌廃寺・吸谷廃寺**」
『**加西市史**』第七巻史料編I 考古 加西市

2) 河合廃寺

田岡香逸・高井悌三郎・藤澤一夫 1958

「**播磨国河合廃寺**」『史迹と美術』287

井内潔 1971 「**播磨古瓦資料1 河合廃寺**」
『井内古文化研究室報』六 井内古文化研究室
井内功・井内潔 1990 『東播磨古代瓦聚成』
井内古文化研究室
岸本直文 1997 「**河合廃寺跡、新部大寺廃寺跡、広渡
廃寺跡**」『**小野市史**』第四巻 史料編I 小野市
岸本直文 2001 「賀茂郡と古代寺院」
『**小野市史**』第一巻本編I 小野市

3) 中西廃寺

島田清 1934 「**播磨国中西廃寺跡の研究**」

『史迹と美術』第43号

鎌谷木三次 1942 「**中西廃寺**」

今里幾次 1996 「**西条廃寺・石守廃寺・野口廃寺・
中西廃寺**」『**加古川市史**』第四巻 加古川市

4) 繁昌廃寺

鎌谷木三次 1942 「**繁昌廃寺**」

井内功・井内 潔 1990 『東播磨古代瓦聚成』

井内古文化研究室

菱田哲郎ほか 1982 「**繁昌廃寺遺物調査報告**」

『**Trench**』34 京都大学考古学研究会

高井悌三郎ほか 1987 「**播磨繁昌廃寺**」

『**寺跡と古窯跡**』加西市教育委員会

5) 吸谷廃寺

鎌谷木三次 1942 「**吸谷廃寺**」

竹原伸仁・津川千恵 2005 「**播磨の法隆寺式軒瓦**」

『**飛鳥白鳳の瓦づくりⅢ**』奈良文化財研究所

中村浩ほか 1992 『**吸谷廃寺跡**』加西市教育委員会

加西市教育委員会 1996

「**吸谷廃寺（第2次）発掘調査 現地説明会資料**」

6) 溝口廃寺・上野遺跡（窯跡）

鎌谷木三次 1942 「**溝口廃寺**」

島田清 1987 「**溝口廃寺**」

『**紀要**』第15号 姫路学院女子短期大学
今里幾次 2010 「**溝口廃寺、上野遺跡**」

『**姫路市史**』第七巻下 資料編考古 姫路市

参考・引用文献

■顎部施文軒平瓦に関するもの

今里幾次 1987 「**播磨・香山廃寺の古瓦**」

『**香山 一縄文遺跡と古代寺院跡**』

兵庫県揖保郡新宮町教育委員会

上原真人 1995 「畿内からみた豊前の古瓦—顎面施文
軒平瓦に関する予察—」『**古文化談叢**』

第34集 九州古代文化研究会

亀田修一 1995 「顎面施文軒平瓦に関する覚書」

『**近藤義郎古稀記念考古文集**』考古文集刊行会
高正龍 2005 「**新羅顎部施文瓦の製作技法—新羅瓦の
編年にむけて—**」

『**MUSEUM**』第596号 東京国立博物館

竹原伸仁 1992 「南山城の古代屋瓦に関する一考察
—軒平瓦に見る雨仕舞いと装飾について—」

『**同志社大学考古学シリーズV**』

竹原伸仁 2010 「南山城の顎部施文瓦」

『**南山城の古代寺院**』同志社大学歴史資料館

■上記以外

大槻真純 1987 「**和久寺の瓦**」『**京都府埋蔵文化財論
集**』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
鎌谷木三次 1942 『**播磨上代寺院跡の研究**』成武堂
金誠龜 2000 「**新羅瓦の成立とその変遷**」

『**新羅瓦塼**』国立慶州博物館 p435

田畠基 1995 「朝来町立脇地区の歴史時代遺跡群」

『**歴史と神戸**』192 神戸史学会

谷本進・潮崎誠 2001 「**殿岡廃寺・三宅廃寺と瓦窯跡**」
『**北近畿の考古学**』

両丹考古学研究会・但馬考古学研究会

寺岡洋 2011 「『**出雲國風土記**』の寺院を訪ねて」

『**むくげ通信**』248 むくげの会

播磨考古学研究集会実行委員会 2003

『**古代寺院からみた播磨**』第3回研究集会記録集
菱田哲郎 2006 「**東播磨の古代寺院と氏族伝承**」

『**喜谷美宣先生古稀記念論集**』

堀大輔 2010 「**飛鳥白鳳の蓋～京都市の古代寺院～**」

京都市文化財保護課